



火用
 花
 子
 系
 部
 部
 下

71
 2950
 3





花紅系都噺卷下

一上々様方候の所^{ゆかり}所^{ゆかり}毎^毎氏^上奉^奉方^方候^候所^所也

畧^略し右^右書^書上^上の^の證^證示^示出^出し候^候に^に畧^畧候^候

一又^又後^後二月^{二月}と^と有^有建^建仁^仁寺^寺と^と日^日々^々教^教石^石の^の粥^粥候^候

た^たき^きら^らと^と凡^凡一^一ヶ月^{ヶ月}毎^毎りの^{りの}乃^乃は^は是^是を^を徳^徳人^人に^に施^施す

ゆ^ゆは^は是^是を^を以^以て^て飢^飢かつ^{かつ}候^候を^を凌^凌ぐ^ぐもの^{もの}實^實方^方と^とり^りし

米^米を^を煮^煮て^て粥^粥と^とし^して^て仁^仁恵^恵され^れば^ば下^下も^も又^又さ^さす

徳^徳小^小化^化し^し大^大坂^坂を^を踏^踏込^込ま^まの^の嘉^嘉納^納の^の我^我も^もく

と^と施^施す^す候^候に^に窮^窮人^人の^の咄^咄り^りの^の畧^畧を^をお^おし

不出卷下

庭うゝに嘗ふ有延た仁意るゝどわ
 一それ災後系比の老たも多きとがれゝどく
 親族朋友と力不焼失せゝる頼りあつと法
 さんもさゝく多々松根せゝうども多ひるや
 東方まふ拂ふく日月の光をみるるごとく
 清仁政されば清交死の清方とくも多々神め
 の宰りまゝとすゝ向合の政道正しく一言世ふ終ふ
 されば犯人と交ひのやうまは来因循の政ゆゑ
 通つては終罪の軽るを分ち知罪めゝらに

仁意然に候ゝとされば系比の老々も比る恩よ
 かろりゝと當時の延後も忘るが如くも外有
 延た清解日く作出されれば多々業比の老ひ
 とさゝく有延とす来小老くぬ又老持の兩人等
 他玉に出るゝの延禁トあひ又亦普信考の務
 以牙に建べゝ抱を爰借を所持のものも信々
 抱を爰の分を了よく建べゝと名よ亦情出
 ぐゝたりのの七老ふと一出一或の道があらひ乃
 小老ゝも老のらひ亦業をらびび一と

仲るるものごとく所免條任付しと為りて其業
 と考へにとんとと股者起上上意あり大工日雇
 とも其銀平日の通よりその銀分むとがけま
 したる中後より若く銀を合する其の所へ出
 づと又徳正材木伐出の後の京都と
 つくると極の勿論の價に合入やうとせん
 任物と又米穀放本を介何より其價へ一め
 する價ふと一しとのへ子速所へ出ると又所
 のの是とのめく上下と其利と及ぶ極くは

中火の後の依りて其股織袴等も其物とせん若
 ともし石の石の依りて其股織袴等も其物とせん若
 ようく人心珠のどくといけ當時今銀も出
 たりとの依りて一出一或はあやした小豆
 かど器ひ家業など下り付小豆俵小廿余日
 成りたる子を辺の飛揚通海とく万平平
 目小復にされば其に普信始り是ふよりの
 人心自然と定まり京地大よ其銀一非道
 の若も銀と志し其改め公命とせんお意

の利徳の外余分を食ふにまよふ人々を
 おもひやり自ら質素を志す人々も
 役所御中ふやうゆかりふとく
 げく從來に又女子の衣履も
 男女の風俗のあはれに引久
 風流温和のゆふ剛強を
 ことごとく悪党の石札と
 作らば此道横車
 と名に成りあはれに怒り
 吹くも
 吹ぬも器機と携へ
 悪徳一掃
 風俗東都の人およそも
 ふとり上を若を好み

めん下自ら正しん
 一采伝老人とく
 五袋の房
 桃細とる
 乃人あり
 くらがらの正月廿九日の夜
 洛東の小沢氏に止宿
 一々琵琶を弾く
 大人は野合
 今宵中に天楸一
 地摺りの愛を
 もつとく園の東へ
 去りけ
 道人が
 とおろし
 げ
 大愛起り
 この

新刊巻下

三

一時の焦亡とさるりぬとさればつあるを經て小沢
 氏の衆人どもも東山寺の精舎に仮居し
 わりしと彼道人のひまの來りたれば衆人を
 其の衆にあつとさるる程に乃人いつくふ火を
 さけあつとわと同たれば乃人笑つて衆人を
 とまひて圓の赤坂ささく教さし一が思もとわ
 芳とぬれば衆あつりの際凡のまよをせとさ
 琵琶弾とさくあつぬるが腹立のまよをせとさ
 急ふ入洛とべたうさるひとて湖中の風を吹

棠一只今ゆり来たりとぞとせられたこと
 とわまの隠者もとりとへとされば昔の名醫
 和氣何未が麻瓜診とて地裏にあり候哉
 先牛の焼の光とて大火の光の影ひるらん
 呆仏老人のありとて斜抱琵琶弾一腔 高山
 流水意深く 怪来餘韻無亮響昔は夜祝融仇帝
 意も又生る桑うとて面白く又洛東の軍塚も
 心月廿九日明動せしと見え又神の奇も爰に示
 しあふのさるるべしとされば候もつとさく

鐵を化し金とすはるゝ易く人の道心と除
 布とるまふの如くや夏小玉の始つとび定昇
 一のひし方民使樂に誘つて永く泰平此厚
 縁と耳んごりより驕奢の風はくに増長し綿
 繡を載して衣被を粧ひ珠玉を縷めく家
 室を粧ふ世の成室これごとく泥土とすりつり
 ごとくかろくび況んや京師の風俗美善を
 せしめて其亮る所と志くは長族大賈
 へいもさるり空乏の若尚是ふ然優く

んの瓜傷るこれば是速多めく明悟の人あり
 浮樸の敷示をやどくはといふも一濁の
 水瓜をく一車菊の火瓜を救ふごとくそとそ
 空しく灰塵とるる時より空を今や
 聖君賢佐とあつてに誘けしあひ徳の海瓜
 化し仁恵死骨に及ぶこれだけ友のやせ世
 の汚濁瓜一愛し乾坤瓜あつては驕奢
 乃浮華瓜拂ひ徳外の風を起しあつと
 有るくも用物くそ瓜をさめぬ

天明さるる雲一初春未深天後依名家
 此詩歌人景捨矣次言その多しと急
 未以共作者を保しむるも此傳
 如く今抄の肉敷るも老尾に記し
 其も此光景の或るを證する
 本邦の精神未だ此の如きあり

洛陽

行

舞名氏

戊申正月晦日曉

燒出洛東描辻子

杜頭僅殘蛭子杜
 青樓簾燃為紅樓
 整々火消行粧者
 點々鐘鼓音聲者
 焰飛河西支市中
 衣新釜及西小川
 上自一条今出河
 四面八方煙簇々
 本原通為洞通理

寺前回祿建仁寺
 白人顏燻成黑人
 忠臣藏之画者帝
 唐綉帳之急逃行
 寺御幸越屋富揚
 越堀河至千本防
 下過五条橋誥塘
 千門萬戶炎昭々
 醒井筋何不能消

染殿地藏地為席
 天神火粉如鋪錦
 東燒西殘本願寺
 个丸不止管木臣
 无恙為原野中嶋
 火花雪散俊成社
 本國塔婆五層覆
 銅駝坊中萬民驚
 行願寺僧皆着革

五条天神天作梯
 藥師燒斃似煮蛸
 上炎下免茶人房
 醫王無効因幡堂
 右習桶取至失桶
 心當夫見夕顏墳
 池坊本堂六角焚
 聚樂高踏千軒薰
 道成鈎鐘再成湯

了出卷之七

水火杜水火共責
妙覺角龍吟起雨
戾橋燒落太勢戾
赫々赤者跣火燃
抱兒夫婦河原泣
算司長持及鍋釜
往來連綿難押分
伏見男女伏不寢
革靴鳴燭洛中乏

今日菴今日燒亡
報息鳴虎嘯助颯
西陳些殘人尽西
皎々白者殘太藏
失親兄弟菜畠狂
弓鎗木小与錢箱
人馬絡繹欲蹈鳩
大津老少大斷腸
豆腐葯蕩平安衰

勿憂御藏一不燼
命今物種喰付生
右狂躰為記事錄而已

仁政施行米醇々
天命何盡天明春

諸名家詩歌

次韻森氏京火之作

清人 蘓元端

祝融行令驅風車災却長安十萬家偌大
詩腸幸不燼吟遊依舊弄春花

京火記事

草廬

東門災厄及池鱗宮闕化煙花作塵應是

何れも昔紙をうへ袖あけて見しとて友なる
物れくまふ

あはれくまふ

高平

心ゆく少くもあつた御書もあつた御書も
あはれ御書も

のかきまふ

一室

孫のあつた御書もあつた御書もあつた御書も
あはれ御書も

柳井氏に御書もあつた御書もあつた御書も

くち御書もあつた御書もあつた御書も

志流らじく御書もあつた御書もあつた御書も

り

菅原

小車れくまふ御書もあつた御書もあつた御書も

あはれ御書も

日一あつた御書も

意地

御書もあつた御書もあつた御書もあつた御書も

小車れくまふ

遠きくまふ御書もあつた御書もあつた御書も

書はたけいふまじり
高澄

陽の東てきくは文の抄り印極ふり

きりくしり

るる後長糸の此書種を
公美

さしきくまおれ後世とも日あけ書はさし

きりくしり春あさ

後記をみる
自文

美ふと東後世は花抄り

い

芸香堂假名物藏板目録
梶川七郎兵衛

京堀川高辻上町

才体柱立

けまの町人考のめりくはち森内くうり後世
らりくしてたやうく一切の事柄の程りはる
妙術とあるなり
今ア三冊

後世行要記

けまの町人考のめりくはち森内くうり後世
らりくしてたやうく一切の事柄の程りはる
妙術とあるなり
今ア三冊

病家心得草

けまの町人考のめりくはち森内くうり後世
らりくしてたやうく一切の事柄の程りはる
妙術とあるなり
今ア三冊

方角

日用辨惑書

けまの町人考のめりくはち森内くうり後世
らりくしてたやうく一切の事柄の程りはる
妙術とあるなり
今ア三冊

吉凶

書札調法記

文章の習(字)瓜あくはち外法の封(一)り
ふり後世の程りはる妙術とあるなり
今ア三冊

花の葉部断

けまの町人考のめりくはち森内くうり後世
らりくしてたやうく一切の事柄の程りはる
妙術とあるなり
今ア三冊

万寶秘事記 貝不篤信著 日用本法の事教記 全 一冊

北畠物語 北畠親房の始末記 全 七冊

石見國孝子傳 石見守藤村八郎著 孝子の始末記 全 一冊

駿河の行状書 駿河守八郎著 駿河の始末記 全 一冊

馬療治調法記 馬のつとめしそか入 全 一冊

牛療治調法記 牛のつとめしそか入 全 一冊

馬療撮要 馬療治を述べたもの 全 一冊

牛療撮要 牛療治を述べたもの 全 一冊

集候和書 徳侯了斎著 全 十六冊

寺子調法記 實治寺の寺子調法記 全 一冊

若導大師行状記 尾刺事大和尚著 全 二冊

大光普照集 八事大和尚著 全 三冊

尾刺八事山諦忍和尚著速書 品々有別目録アリ

正信偈繪抄 正信偈の所文の繪抄 全 二冊

仔細矢全 仔細矢の全書

仔細矢の全書 仔細矢の全書

唐士奇談 全部五冊 繪入

けいこ中華の康熙二年の事 けいこ中華の康熙二年の事 けいこ中華の康熙二年の事

天明八年 戊申 孟冬

江戸書肆

日本橋室町三丁目

須原屋市兵衛

大坂書林

心齋橋筋北太即町北入

河内屋喜兵衛

京都書房

西堀川高辻七町

梶川七郎兵衛

